

# What is phraseology about? と What about phraseology?<sup>1)</sup>

—イディオムはどのようにして形成されるか—

八 木 克 正

## 1 はじめに

表題の2つの文例は、文脈にもよるが、それぞれ「フレイジオロジーとは?」「(他の研究にあきたらなければ) フレイジオロジーはいかが? (勉強してみませんか)」の意味である。表題の2つの例文のWhat is … about?/ What about (...)? はそれぞれ成句あるいはイディオムと考えてよい。それぞれは共通の構文から、別のプロセスを経て生じたものである。「成句あるいはイディオム」と言ったが、定義によって成句とイディオムの区別は微妙なところがあるので、まとめてphraseological unit (略称PU) と呼ぶことにする。これは、成句表現もイディオムも、その他ことわざなど定形表現として言語に定着したものを含む包括的な用語である。以下、略称のPUを使う。本稿の目的は、これらのPUの形成過程を跡付けること、それらの意味を明確にすること、形成過程の一般化の一部を提示することにある。最後にPU形成の一般法則と、コロケーション、成句、イディオムの定義を試みる。

本稿では、第2節でまず前置詞句がbe動詞に後続する形式は3つの場合があることを述べる。そして、第3節では、about句とwhat疑問文/ what間接疑問文とがどのような文法操作によって関係づけることができるのか、第4節では、be aboutとwhat … is aboutがどのような過程を経てPU化したのかを跡付ける論理的なプロセスを提示し、第5節では、PUとしてのbe aboutと、発展形としてのWhat is it all about? について論じる。第6節では、本稿や他の研究を通じて、PU形成の一般的プロセスを考える。

## 2 補語が前置詞句になる場合

### 2.1 be + 前置詞句のいろいろ

be動詞の補語が前置詞句になると、ある種の意外性が感じられる。その理由は学習文

1) この研究は、辞書メーリングリストLexでの村田年氏、田上芳彦氏の議論(2009/11/11, 14, 14, 15)がきっかけになった。扱われたトピックは私のフレイジオロジー研究と密接な関係があるので、研究を深めてみることにした。本稿での議論も田上氏があげた用例も使用し、それらの説明をすることになる。

法で補語の種類として前置詞句をあげることが少ないからである。補語になる前置詞句として文法書であげられるのは、せいぜいin good health (=healthy) やout of breath (=breathless) のような形容詞に置き換え可能なものに限られる。だが、言うまでもなくこのような成句的なものばかりではない<sup>2)</sup>。それ以外にも、いろいろな前置詞句がbe動詞の補語になった例がある。BNCからいくつか実例をあげておく。

- (1) a. The music can be of any sort, of any age, and no matter how tattered or torn.  
(その音楽はどんな種類のものでも、どんな時代のものでもよく、またどれほどずたずたでもばらばらでもよい)
- b. The essential projection is of simple wooden furniture, plain walls, some carpeting on the polished floorboards.  
(基本設計は素朴な家具に、飾りのない壁、磨いた床板の一部にカーペットを敷いたものになっている)
- c. The emphasis of the open discussion was on being positive and being aware of crime prevention (sic. prevention) responsibilities.  
(公開討論で強調されたことは、積極性をもって犯罪防止責任を肯定的に受け入れることであった)

(1a) ではmusic of any sortのようにmusicを補うことができることから、of any sortは音楽の種類を言っており、classical, jazzなどと同じく名詞または形容詞に対応している。

(1b) では名詞句the essential projectionを説明する形容詞的機能をもった前置詞句から発達したものであり、形容詞句と考えてよい。(1c) も本来はemphasisに続いて強調する対象を述べる前置詞句が補語の位置にきたものである。

一方、The book is on the table.では前置詞句のon the tableはここで議論する形式とは異なる。on the tableは疑問副詞whereを使ったWhere is the book?に対する答えになるから、副詞的機能を果たしていることがわかる。

では次の2例ではどうだろうか。

- (2) a. Plans were at an advanced stage when Hamnett, having vacillated for some time, phoned the BFC to say she had decided in favour of Paris after all.  
(ハムネットがしばらくためらってからBFCに電話をし、結局はパリに決めたことを伝えた時には計画は相当進行した段階にあった)
- b. A proper regard for human dignity leads to proper respect for human life from its origin, which IVF itself demonstrates is at fertilisation.  
(人の尊厳に対する正しい敬意をもっていると、人の生命の始まりから正しい敬意

2) in good health, out of breath, of importanceなどの前置詞句からなるPUは、もともとはごく普通の前置詞の使い方から意味・形式的に固定化してきたものである。それぞれinは「状態」、out ofは「離脱」、ofはa person of importanceのように名詞に説明を加える形容詞句を作る用法から発達したもので、ofの前に修飾すべき名詞の存在が前提である。これが独立して、叙述形容詞的にも使われるようになった。

の念をもつことになる。生命の始まりとはIVF自身が明らかに示しているように、受精の時である)

(2a) のat an advanced stageは計画の進行段階を述べており、At what stage are the plans?に対応させることができ、副詞句と考えることができ、補語とは考えない方がいいだろう。

(2b) はかなり微妙だが、関係部分だけを取り出すと、the origin of human life is at fertilisationとなり、at fertilisationの部分が答えになる疑問文はWhere is the origin of human life?と考えることができるから、副詞句と考えていいであろう。

このようにbe + 前置詞句の性質は簡単には決めにくい、いろいろな性質をもったbe +前置詞構文が広く使われていることは知っておかねばならない。

## 2.2 be + about句

以上、beの後にはいろいろな前置詞句が来ることをみた。ここではaboutに限って例をみてみよう。

前置詞aboutが作る前置詞句を「about句」ということにする。be + about句には多様な例があるが、BNCからいくつかの例をあげておく。

- (3) a. The discussion, he says, is about colour and differing cultural perceptions.

(その議論は、彼が言うところでは、色と多様な文化的知覚についてである)

- b. Today's reading, from The Eighteenth Emergency by Betsy Byars, is about a boy called Mouse Fawley.

(今日の読書会はベッツィ・バイアーズ著「18番目の緊急事態」からで、マウス・フォーリーという少年についての話である)

- c. CHESTER'S Victoria County History Appeal is being helped by a series of lunchtime lectures. One held today, from 1-2pm, is about Chester in the Civil War.

(チェスターのビクトリア郡・ヒストリー・アピールは一連の昼食時講演会から支援を受けている。今日の講演は1時から2時までで、南北戦争時代のチェスターについての話である)

- d. The book, you see, is about walking.

(その本はね、実は散歩について書いてあるのです)

- e. The other pictures may be more romantic, being about the excitement and expectation of travel, but the airports series is more about waiting, about the dehumanisation of the environment and awe in the scale of the aircraft.

(他の映画はもっとロマンチックかも知れません。旅行の興奮と期待を描いています。しかし、空港シリーズでは待たされること、環境を人間が住めないようにす

るとか、航空機のスケールの大きさに心をうたれることが描かれています)

上例中のabout句はいずれも (1) のタイプと同じで、構造上be動詞の補語になっている。名詞の中にdiscussion, reading, lecture, bookなどのように特定の前置詞句を要求するものがある。「…についての」議論、読書会、講演、本という関係があるからabout句を要求する。では (3e) のthe airports seriesの場合はどうだろうか。文脈からthe airports seriesはpicturesであることがわかる。つまり、文としてはthe airports seriesが主語になっているが、意味的にはpicturesのことを述べている。「…についての」pictures (映画) であるからaboutが要求されているのである。

(3) の諸例は、a book about walkingの関係にある場合に、その前置詞句が補語の位置に移動してThe book is about walkingの構造になったと考えることができるであろう。この関係は、基本的には修飾・被修飾の関係にあるa beautiful flowerと、主語・述語の関係にあるthe flower is beautifulと対比することができる。

注1) で述べたメーリングリストで、田上氏は大学入試問題から次のような例をあげている。

- (4) a. Education in its deepest sense has always been about doing, rather than about knowing. (2003 お茶の水女子大)  
(教育とは最も深い意味において常に、知ることよりは行うことに本質があった)
- b. Engineering is about the application of knowledge and experience to produce something, or to design a practical solution to a problem. (2003 千葉大学)  
(工学とは、知識と経験を、何かを作り出したり問題の具体的解決法を企画し応用するところに本質がある)
- c. Politics is clearly about power, but this key concept is difficult to define. (2008 学習院大・法)  
(政治とは、その本質は明らかに権力であるが、その鍵になるこの概念は定義しにくい)

これらの例ではいずれもeducation about doing/ education about knowing/ engineering about the application of knowledge and experience/ politics about powerという修飾関係は通常は成立しない。仮に成立しても意味的にはまったく違ったものになっている。また (2) のようにWhere is education …?という疑問副詞を対応させることもできない。(4) の諸例は、(1) (3) とともに (2) と異なる第3の形式と考えるべきであろう。(4) の類例はBNCに数多く見られる。

- (5) a. If anorexia is about identity in general, it is also specifically and most importantly about autonomy.  
(食欲不振が自己同一全般にその本質があるとするならば、それはとりわけ、またもっとも重要な点で、自律そのものである)

- b. He described journalism as being about comforting the afflicted and afflicting the comfortable.  
(彼はジャーナリズムを、苦しむ人たちを慰めることが本来の働きであり、同時に、安穩に生きる人たちを苦しめるものでもあることを描き出した)
- c. Sat along the front of the stage, bored looking girls can't even be bothered to turn around and see what all the commotion is about.  
(舞台の前面に並んで座って、退屈そうな女の子たちはその騒ぎが何なのかわざわざ振り向いて見ようとする様子もなかった)
- d. Dreaming is about using the information that you already know.  
(夢は本来、既知の情報を使うことである)
- e. Healthy eating is about much more than the kinds of food we eat.  
(健全な食事はわれわれが食べる食物の種類以外にもさまざまなことが関わっている)

これらの例はいずれも anorexia about identity/ journalism about comforting the afflicted/ the commotion about …/ dreaming about using information/ healthy eating about much more …という限定修飾的用法の場合とは全く異なった意味を持っている<sup>3)</sup>から、ここで使われたbe aboutはやはり成句として確立したものと考えることができる。

### 3 about句とwhat疑問文/ what間接疑問文との関係

(3) のような例のabout句の中の名詞句を問うwhat疑問文は(6) のようになるであろう。

- (6) a. What is the discussion about?  
b. What is today's reading about?  
c. What is the lunchtime lecture about?  
d. What is the book about?  
e. What are the pictures about?

これらの疑問文は、(7) のようなaboutのないwhat疑問文とは性質が異なる。

- (7) a. What is the discussion?  
b. What is today's reading?  
c. What is the lunchtime lecture?  
d. What is the book?  
e. What are the pictures?

(7) の文はそれぞれ、(8) に対応する。

3) 本稿ではEducation is about doingの場合のeducationとbe動詞の後のdoingの関係と、education about doingのような限定修飾的用法な関係の場合とが全く異なった意味を持っている書き換え表現には、†を付す。

- (8) a. The discussion is X.  
 b. Today's reading is X.  
 c. Lunchtime lecture is X.  
 d. The book is X.  
 e. The pictures are X.

要するに、(7) は (8) の主語である名詞句が何かをたずねる疑問文であり、内容的には意味のある問答にはならない。(7a) は、「その議論は何ですか」、または総称的に「議論というものは何ですか」という意味になるだろうが、質問の意図がわからない。それに対して (6a) は、「何についての議論ですか」とうことで、質問の意味は明確である。

たとえば “parasol” という言葉を初めて聞いて “What is a parasol?” と問うことは意味がある。また、parasolという物を目に見て名前も分かっている場合に、その用途を聞いて “What is a parasol for?” ということも意味があるだろう。(6) を I would like to know… に続く間接疑問文にすると、I would like to know what the discussion is about. となることはあきらかであろう。(4) や次にあげる (8) から(all) aboutを省くと意味的に全く変わることは明らかである。

(4) (5) としてあげた用例のabout句の中の名詞句を問うwhat疑問文を作って (9) (10) として以下にリストする。本質を理解しやすいようにするために、単純現在形にしている。

- (9) a. What is education about?  
 b. What is journalism about?  
 c. What is politics about?  
 (10) a. What is anorexia about?  
 b. What is journalism about?  
 c. What is all the commotion about?  
 d. What is dreaming about?  
 e. What is healthy eating about?

これらの疑問文からaboutを取り去るとまったく違った意味になることは明白である。

既出のメーリングリストで田上氏は次のようなwhat間接疑問文の例を入試問題の中から抽出しているので、そのうちのいくつかを借用することにする<sup>4)</sup>。

4) (11a) の用例ではbe all about …の形になっている。また他の引用例でもall about …になったものが少なくない。このallの意味と機能を考えておこう。MED<sup>2</sup>は特に「口語」とか「くだけた」という指示はなく、be aboutの特別な用法として、次のようなイディオムとして解説をしている。

be about something

used for saying what the most basic or important aspect of a particular job, activity, or relationship is  
 Loving and sharing – that's what marriage is about.

all about Good management is all about motivating your staff.

要するに、主語の本質が何であるかをabout句が説明している。そして、強意のallを伴うことが多いことをall aboutの形をあげて示している。別の語義 (1c) でもall aboutのコロケーションをあげてThey'd forgotten all about poor Harry. (彼らはかわいそうなハリーのことをすっかり忘れていた) の例をあげている。特に今問題にしているbe aboutとは必ずしも関係なくallがabout句の前に来ることがわかる。

- (11)a. That's what being an environmentally friendly consumer is all about.

(1992 岡山大学)

(環境にやさしい消費者になるということはそういうことなのです)

- b. This is what stress-busting is about—getting your thoughts back on a reassuring track.

(1996 上智短期大学)

(ストレス発散とはそういうことなのです—自分の考えに自信をもつ方向に戻すことなのです)

類例はBNCに数多い。

- (12)a. “I don't know what all the fuss is about,” Clive Berlin, QPR's managing director, said.

(「一体全体それが何のさわぎなのか分からない」とQPR常務取締役のクライブ・バーリンが言った)

- b. The challenge: to turn the Soviet Union into a market economy. Surely that is what perestroika has been about these past five years ?

(挑戦：ソ連邦を市場経済に方向転換すること。間違いなくそれがペレストロイカがこの5年間目指してきたことだろう)

以上のような議論から、平叙文形式、直接疑問文形式、間接疑問文形式のどの場合が多いか少ないかなどということはこの問題の本質ではない。

#### 4 be aboutとwhat … is aboutのPU化プロセス

これまでの議論を具体的な例をみながら整理しておこう。

- (13)a. a discussion about color

- b. The discussion is about color.

---

MED<sup>2</sup>のallの項第3義に当たるものである。以下にその記述を引用する。

3 *completely*

3a used for emphasizing that something is completely true

I'm *all* in favour of giving children more freedom.

Now we're going to be late, and it's *all* because of you.

*all over* (=completely finished) Divorce is a very complicated business – I'll be glad when it's *all over*.

3b informal used for emphasizing how strong or complete a feeling or quality is

He started to get *all* excited when I told him Cynthia was coming.

このallは「まったく、すっかり」の強意の意味の副詞である。

井口(2005)がgoogleで検索した結果をもとに、all aboutをとる動詞をリストしている。具体例として、次に(i)としてあげたものがある。

- (i) Only she knew the line already because her friend had told her all about him.

このallについて「名詞句相当」とであると述べている。このallはtoldの直接目的語であり名詞句であることは当然で、about himはallを修飾している。従って、ここで問題にしているPUのbe aboutとは関係はない。おそらくリストされたargue, debate, find outなどの動詞もall about … がそれぞれの動詞の目的語になっているのであろう。井口氏自身、この表の「結果はallが代名詞か副詞かを判断する材料にはまったくならない」と述べているが、当然のことである。

- c. What is the discussion about?
- d. I don't know what the discussion is about.
- (14) a. † politics about power
- b. Politics is about power.
- c. What is politics about?
- d. I don't know what politics is about.

(13) では (a) から (d) まですべてを一連の操作で文法的に関連付けることができる。(a) は前置詞句が名詞句を限定する用法、(b) は前置詞句が補語になった叙述用法、(c) はaboutに後続する名詞句を問うwhat疑問文、(d) はその間接疑問文である。

一方 (14) では (a) と (b) には (13) のような対応関係がない。(14a) は英語として成り立つが (14b) との対応関係がない。それを除けば (b) (c) (d) には (13) と同じ対応関係を見ることができる。

では (14b) の形式がなぜできたのだろうか。それは次のように説明できるだろう。(13b) のような例は数多い。この形式の中のabout句は本来beの補語であったものが、[be about] として再分析<sup>5)</sup> され、一種のPU化が起こった。PU化することによって (13b) が成り立つための前提とされていた (13a) と (13b) の間の関係が自由になった。すなわち、(14b) のように、主語Aとaboutの目的語Bとの関係に制約がなくなり、be aboutが「AとはBに関することである」あるいは「Aの本質はBだ」の意味を表すPUとして確立した。

このようにbe + 前置詞が成句として確立した例には、be for … to do/ be on …/ be through with…など数多い<sup>6)</sup>。be aboutはそのひとつである。A be about Bは、「AがBを説明する」という原義から、「Aは本質的にBなのだ」というPUとしての意味を確立すると、後は必要に応じてAとBにはそれぞれ発話者の意図によってどのような種類の名詞句でも入ることが可能になる。従って、Aにどのような名詞句が多いとか、Bにはどのような名詞句が多いとかを調べても大した意味がない。一部の辞書が記述しているようにBが動名詞に限られるということもない。PUになることによってAとBの関係が自由になり、Aを説明するものであればどのようなものでもBになることができる。これがPU化の証拠でもある。

さらには、What about?というPUがある。(15) のようにaboutが目的語をとることもあるし、(16) のように独立して使われることもある。(15) (16) はいずれもBNCから。

(15) Before you take off, ask yourself the following questions.

Is the glider ready?

5) 再分析 (reanalysis) については八木 (1999: 105ff) を参照。

6) 次例を参照。すべてMED<sup>2</sup>からの引用である (紙面の都合で訳は省略)。

(i) She wouldn't tell me; she said it was for me to figure out.

(ii) His son has been given preferential treatment. That is simply not on.

(iii) I've told Larry I'm through with him, but he keeps bothering me.

ただ、これらのPUの形成過程についてはそれぞれ独特のものがある。



What about the weather conditions?

Are you ready for a launch failure?

Is it safe to go now?

(離陸する前に次のことを自問しなさい。グライダーの準備はOKか? 天候はどうか。  
離陸失敗の時の準備はいいか。今飛び立って安全か)

- (16) He began to kiss her fingers, one by one, and Meredith gazed helplessly at him, knowing she loved him with such a sudden, painful realisation that she groaned aloud.

“Please don't,” she breathed, thinking of Katarina.

“What about?”

His finger pressed her lips, his eyes warning her not to continue.

(彼は彼女の指の1本1本にキスを始めた。そしてメレディスはなすすべもなく彼を見つめていた。そして彼女は彼を愛していることを突然悟り彼女はうめき声をあげた。「止めて」とカタリーナのことを思い起こしながら息をついた。「何を?」彼の指が彼女の唇を押さえ、目が声を出すかと警告をした)

(15) のWhat about…? は新しい話題の提供である。一般的に、What about …? はすでに述べたことに加えて「…についてはどうか、どう思うか」という疑問を提起する。

(16) は “Please don't.” といったことに対して、「何について?」と詳しい説明を求めている。

What about (…)? のもとの形は、What is it about? であり、そこからis itを省いたものと考えられる。一般的な形として考えると、(17a) が基本的な形で、(17b) はMary and Suzanが答えになる疑問文であり、そこから文脈上明らかなis itを省いた形が(17c)である。

(17) a. It is about Mary and Suzan.

b. What is it about?

c. What about?

このようにして成立したPUとしてのwhat about?は、もともとの「何について?」の意味を保持し、次節で扱うWhat is it (all) about?とは違った、本来の意味を担う表現として固定化された。

## 5 PUとしてのbe aboutと発展形としてのWhat is it all about?

第4節で述べたような過程を経て形成されたbe aboutは、OEDの第2版でPUとしてあげられるようになった。OED<sup>2</sup> (sv., about B prep. I 7c) を引用する。

In colloq. phr. *to be (all) about*, (of an abstract subject) to be primarily concerned with; to

have as a central theme or essential truth. Freq. used without a named subject, as *what it's all about*, the reality of a situation.

1937 P. Tomlin *Love Bug will bite You* (song) 2 That's what love is all about. 1943 [see hokey-cokey]. 1962 Listener 20 Dec. 1046/2 This immense transition—from being a slave to being a friend—is what Christianity is all about. 1971 A. Shaffer *Sleuth* i. 39 Poor blighter, he had no idea what it was all about.·· Sitting there every night hunched up over those watches. 1976 *Listener* 20 May 637/3 After all, this is what the concept of a tolerant multi-cultural, multi-racial society is all about. 1982 A. Price *Old 'Vengeful'* 247 Love and war were about winning, not fair play. 1984 A. Brookner *Hotel du Lac* 166 They like the feeling that they have had to fight other men for possession. That is what it is all about, really.

語義解説では、「口語で、be (all) aboutの形で、抽象名詞主語をとって、第一義的に関わっている、中心的・本質的な真実を担っている。しばしば明示された主語をとってwhat it's all aboutの形で「状況の現実」の意味で」ということであり、初出の例は1937年であることがわかる。口語でありながら、書き言葉から用例をとる時間的ギャップを考えると、もっと古くから使われていたのであろう。

OED<sup>2</sup>は上の引用の中で特にwhat it's all about (「ことの本質、本当のところ」の意味)を特によく使われる例としてあげている。この表現は、be aboutがさらに特定の表現としてPU化したものと考えることができる。この例はBNCには99例、WBには72例ある。BNCから2例あげておく。

- (18) Undoubtedly one of the best ways the overseas student has of seeing what is required in British theatre training is to apply for one of the summer schools offered by the drama schools, and find out what it's all about before committing him- or herself to a long and expensive stay. [BNC]

(おそらく海外の生徒が英国の俳優養成訓練に何が求められているかを知る最上の方法のひとつは、長期にわたる高価な滞在に身を投じる前にドラマ学校が提供するサマー・スクールに応募して、本当のところを知ることだ)

- (19) Even those who like bandstand defiantly declare that what works in Philly won't work in LA. Call it a tale of two cities, culture shock—that's what it's all about. Old cop culture vs. the new, East Coast style in a West Coast town. [BNC]

(野外ステージが好きな人たちでさえフィラデルフィアでうまくいくことがロサンジェルスではうまくいかないと大胆に断言する。二都物語、カルチャーショックとも呼んでくれ。事実はそのところだ。＜古い警察文化＞対＜新しい西海岸の町の中の東海岸スタイル＞だ。)

allのない例もある。こちらはWBからあげておく。

- (20) When people look at photos of models, they might see something sexy and they might not. But I'd never use the word "sex". That's not what it's about for me." Neither is she particularly thrilled at being considered one of the world's leading sex symbols. [WB]

(モデルの写真を見て何かセクシーなものを感じる人もいるし感じない人もいるだろう。しかし私は決して「セックス」という語は使わない。私にとってモデルとはそんなものではない。モデルの女性だって世界をリードするセックスシンボルの1人と思われて特に大喜びするわけではない)

- (21) But Brenya reads the papers and knows about the friction in her community and she says the issue here is not racism.

Brenya: Racism is totally contrary to all Torah beliefs. I think what it's about here is fear--a lot of fear. [WB]

(しかしブレーニャは新聞を読んで地域の軋轢のことは知っている。そしてこの地域での問題は人種差別ではないと言っている。ブレーニャ：人種差別はトーラの信仰とはまったく正反対だ。ここで起こっていることの真実は恐怖だ－恐怖がたくさんある)

allの有無による意味の違いは、allが意味を強めるという以外にはないように思われる。

さらにWhat is it all about?という直接疑問文の形のものがBNCには8例、WBには4例ある。「本当のところはどうなんだ、それがどうしたんだ」という意味に解釈できる。2例だけあげておく。

- (22) Music Season in the UK, starting today. New Nordic music will be premiered by the Nash Ensemble and their Finnish counterparts, Avanti! A new Icelandic opera by Karolina Eiriksdottir opens on Thursday; the Gothenburg Symphony Orchestra, under Neeme Jarvi, will present a Sibelius cycle at the Barbican in April, and a Nordic week is planned in Birmingham in October. So what is it all about? Is Nordic music really distinctive? [WB]

(連合王国の音楽シーズン、今日開幕。新しいノルディック音楽がナッシュアンサンブルとフィンランド版アバンティが初演予定になっている。カロリーナ・アイリクスドットティール指揮の新しいアイスランドオペラが木曜日に開幕。グーテンベルグ交響楽オーケストラがネーメ・ヤルビ指揮で4月にバルビカンでシベリウスのサイクルを公演し、そして10月にはバーミンガムでノルディック週間が開幕予定である。それがどうしたんだ、だって？ノルディック音楽が本当に特別な音楽か、だって？)

- (23) "Let us remove to somewhere more private."

"Willingly," Rose agreed, and led the way to a small antechamber that led off the

main saloon. It was deserted, and the two ladies settled together on the small sofa.  
“Now, ma'am, what is it all about?” demanded Rose without preamble.

Lady Usk's eyes were eager.

“Well, my dear, it is an old tale now.” [BNC]

(「もっと人のいない所に移動しましょう。」「喜んで」とローズは同意した。そして、中央大広間を抜け出る小さな奥の間へと案内した。そこは人気がなく、2人のレディーは小さなソファに並んで落ち着いた。「さあ、奥様、それはどういうことですか」と前置きもなしにローズはたずねた。ウスク婦人の目は熱を帯びていた。「そう、奥様、今となっては古い話なの」)

このように、What is it (all) about?は間接疑問文の場合も含めて、PUとして確立していると考えていいだろう。基本的な形はOED<sup>2</sup>では間接疑問文になっているが、ここでは直接疑問文を基本と考えることにする。

## 6 コロケーション、成句、イディオム

これまでPUと呼んでいた成句あるいはイディオムとはどういうものかを考えておく。本来は成句とイディオムとは区別すべきものであるが、本稿で扱ったbe about/ what it is (all) aboutは成句かイディオムか微妙なところがある。英米の学習辞典や日本の英和辞典をみても、コロケーションは語義定義の中で扱い、成句とイディオムは格別の区別をせずに一括して扱うのが一般的である。なぜならば、成句とイディオムの区別が難しいからである。

日常的な言語使用の中で、一定の文法構造に合った単語の選択をする場合に、無意識的に結合しやすい語どうしができてくる。病気の名前でもa cold/ the flu/ a chill/ pneumoniaは 動 詞catchと、a disease/ malaria/ typhoidは 動 詞contractと、cancer/ diabetes/ AIDS/ arthritis/ Alzheimer's diseaseは動詞developと結合しやすい。それぞれに結合しやすくなる理由は動詞と名詞の意味に深く関わるが、そのような点について深く追求する必要がないという立場もあれば、それを追及するという立場もあり得る。言語学習においては、理由の説明よりはそれらを覚えることの方が優先することは確かである。病気と特定の動詞との結合のしやすさはコロケーションの問題である。コロケーションはいろいろな定義がなされてきた。Hoey (2005: 5) は次のように定義している:

… it (=collocation) is a psychological association between words (rather than lemmas) up to four words apart and is evidenced by their occurrence together in corpora more often than is explicable in terms of random distribution.

(コロケーションとは最大4語離れた(レマではなく)単語どうしの心理的結合で、コーパスの中で無作為分布によって説明できる以上に共起することによって立証できるものを

いう)

例えば{work}, {works}, {working}, {worked}はそれぞれ語（語は| |で、レマ (lemma) は[[ ]]で囲むことにする）であるが、これらは[[work]]というレマの具体的な表れである。{working}と{works}はそれぞれに異なった分布を示すことが知られているところから、ひとつひとつの語どうしの関係を問題にするというのがHoeyの考えである。ここではとりあえずこの定義を使うことにする。

名詞、形容詞、動詞はそれぞれに表したい意味に従って結合しやすい前置詞がある。特定の前置詞との結合もコロケーションの一種である。

成句とはコロケーションの結合度がさらにすすみ、結合した要素どうしがひとつの単位になって、新たな機能を帯びるようになったものをいう。たとえばmuchという単語はvery much, pretty muchのようなコロケーションをとる。このうち、pretty muchは、多様な機能を帯び、動詞句、名詞句、前置詞句など多様な被修飾語をとる。

(24) a. The courts have pretty much rejected it.

b. That is pretty much what happened.

c. I think I'm pretty much in the English Christian Socialist tradition.

これらの例は八木（2006）による。このような機能はpretty単独やmuch単独にはない機能である。しかし「かなり」という意味を和らげる（downtoner）意味は保持したままである。ここでは、基本的な意味的特徴を保持しながら新たな機能をもつようになり、さまざまな文脈で多義性を帯びるものを成句という。

成句からさらに別の成句を生み出すこともある。たとえばnot only … but also …という成句を基本としてそこからbut alsoだけが独立して新たな成句が形成されている（八木 2006: 223ff.）。

イディオムは、一般的定義にならい構成要素の語の総和から導くことができない新たな意味を獲得し、形式・意味両面で固定化したものをいうこととする。

このように定義すると、本稿で扱った“NP1 be about NP2”は新たな意味（NP1の本質はNP2である）と機能を獲得したイディオムである。what is it (all) about?も同様にイディオムである。間接疑問文になって使われることも多いが、これらはいずれも意味的には固定化し、文脈の中で多義性を帯びることはない。

第4節で、“be about”のPU化のプロセスに「再分析」が関係していると述べた。さらに、PU化したbe aboutは“NP1 is about NP2”というパターンを形成しNP1, NP2には話者の意図によって何でも入れることができる。これがさらに固定化してWhat is it (all) about?の疑問文、あるいはさらに間接疑問文の形でwhat it is (all) aboutがPUの中でも特にイディオムとして固定化した様子を見た。

What about … ? に似たPUにWhat is it for?/ What for? がある。こちらの方がWhat about…?よりよく知られているが、(24)と同様の過程を経て形成された成句である。

(25) a. I used the money for hiring two cars.

b. What did you use the money for?

c. A: I spent the money.

B: What (did you do it) for?

このようにWhat for?が独立して使われるようになると、「何のために？」から「なぜ？」の意味への一般化は自然のなりゆきである。

(25b) は文法的にはFor what did you use the money?とすることも可能であろうが、今の英語では疑問詞を目的語にとる前置詞は文末に置くことが多い。What for? は間のdid you do itが省かれたのであり、For what?が語順転倒を起こしたのではない。

What about? はもっぱら本来の意味で使われるのに対し、What for? は疑問詞としてWhy?と同様の意味と機能をもつに至った。

このように、“be about” “what it is (all) about” “what about …?” “What for?” はそれぞれ別な過程を経てPU化した。“be about” は再分析、“what it is (all) about” はbe aboutの特殊な形の固定化からさらに本来の意味とは違った「その本質は？」というイディオムとしての意味を獲得した。“what about …” は固定化、“what for” は固定化とその発展として“Why?” と同義のイディオム化の道をたどった。一般にイディオムになると使用頻度は減る。陳腐化 (cliché) してしまって、かえって使用を避けることもあるだろうし、意味が特定化されるために頻度が低くなることがその原因であろう。よくイディオムの例としてkick the bucketやspill the beansが出されるが、実際の使用例を日常見たり聞いたりすることは極めて稀である。それに対して、成句のpretty muchは極めて頻度が高く、機能も多様であることは先にみた通りである。

八木 (2008) において、no sooner … thanとas soon asをもとに、no sooner thanという、もとの2つのPUが混交してできた新たなPUの存在を論じた。少なくとも、再分析、固定化、混交が新たなPU形成のタイプとして想定することができる。

## 7 結語

Power is about politics./ What is politics about?/ Tell me what politics is about./ What about? というイディオムの形成について述べてきた。成句、イディオムは一朝一夕にできるものではなく、長い形成期間を経てできあがるものである。また、一般的には文法構造と関係なくランダムに形成されるものでもない。PU形成の一般的原則は、文法化、イディオム化とも関連が深いが、成句やイディオムが形成される形成過程は今後もっと多様なタイプをもとにして一般的な説明ができるであろう。今後の課題としたい。

## 引用コーパス

BNC: British National Corpus (小学館コーパスネットワーク)

WB: WordBanksOnline (小学館コーパスネットワーク)

## 引用辞書

*MED*<sup>2</sup>: *Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*, 2<sup>nd</sup> ed. London: Macmillan.

*OED*<sup>2</sup>: *Oxford English Dictionary*, 2<sup>nd</sup> ed.

## 引用文献

Hoey, M. (2005) *Lexical Priming: A New Theory of Words and Language*. London: Routledge.

井口 淳 (2005) 「What thing is all about?の英語表現について」『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』(神戸大学レボジトリ)

八木克正 (1999) 『英語の文法と語法—意味からのアプローチ』東京：研究社出版.

八木克正 (2006) 『英和辞典の研究—英語認識の改善のために』東京：開拓社.

八木克正 (2007) 『世界に通用しない英語—あなたの教室英語、大丈夫?』東京：開拓社.

八木克正 (2008) 「X no sooner than Yとno sooner X than Y」『英語教育』2008年8月号「クエスチョンボックス」(Vol. 57, No. 5) 75-77.

## *What is phraseology about?* and *What about phraseology?*

Katsumasa YAGI

This paper is part of the research on English phraseology supported by the Grants-in-Aid for Scientific Research (Challenging Exploratory Research) for the academic year 2012.

Phraseology covers a large area of research interest, but this paper is concentrated on the synchronic explanation of how set phrases or idioms (for the convenience of reference we use the cover term “phraseological units” (PUs, for short), which refer to set phrases, idioms, collocations and even proverbs) are formed.

This paper first discusses the two PUs that have come to be registered in the *Oxford English Dictionary*, 2nd edition, with their earliest citations in the 1930's. Of these two PUs, *What is ... about?* seems to be relatively unfamiliar to Japanese learners of English. While *What is phraseology?* asks for the definition of the term “phraseology,” *What is phraseology about?* asks for the essential nature of “phraseology,” so to speak, after having learned the definition of “phraseology.”

After those basic discussions, this paper claims that the “be about” in *What is phraseology about?* is the basic PU which is used to form sentences like *What is phraseology about?*/ *What is it about?*/ *Politics is about power*, and so on. It has developed from the ordinary collocation found in the sentences like *The discussion is about politics*. It also discusses that *What is it all about?* and *What about ...?* have come to be so fixed with their special semantic significance that they are now recognized as set phrases in the English language.

Then the discussion goes further into the general principles and processes by which PUs are formed.